中日新聞 （第3種郵便物認可）

ニュースを問う

風化とたたかう 第2部

豊明事件「未解決」の検証 ❶

放火と消火で消えた証拠

加藤 美喜（編集委員）

母子4人を殺害したのは誰なのか。なぜ犯人が捕まらず、これほどの事件がコールドケース（長期未解決事件）となってしまったのか。

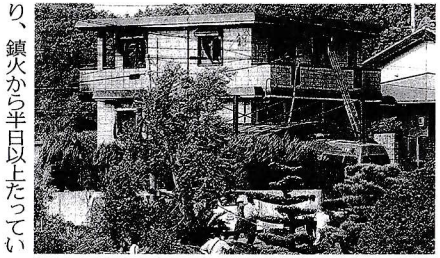
2004年9月9日、愛知県豊明市の会社員宅で妻の加藤利代さん＝当時(38)＝と長男佑基さん＝同(15)、長女里奈さん＝同(13)、次男正悟さん＝同(9)＝が殺害され、放火された事件で、愛知県警はこれまでに延べ5万3千人以上の捜査員を投入してきた。情報提供は200件を超えたが、犯人逮捕には結び付いていない。

凄惨な現場 胸に残る

私は元捜査員たちに手紙を書き続けた。この事件に心血を注いで捜査した彼らの見立てや、思いを聞きたかった。

手紙を出した相手の中には、記者仲間の間で「ブンヤ（新聞記者）嫌い」で知られる人たちもいた。ハードルは高いと覚悟したが、ありがたいことに、少しずつ返事がもらえた。彼らは、取材に応じてくれた理由を「事件を風化させたくないから」「今も情報提供を呼び掛ける、ご遺族の姿に胸が痛むから」と語った。

ある元刑事は事件当日、現場に入った瞬間の感覚を肌で覚えている。消防の消火活動が終わり、鎮火から半日以上たっていたが、「中はサウナのように熱かった」。放火で激しく焼かれた家は、強い熱をまだ帯びていた。火元とみられる1階リビングで見つかった末っ子の正悟さんの遺体は、荼毘に付されたように損傷が激しかった。「こんな小さな子どもまで殺すのか。なぜ、何のために」。その凄惨さに言葉を失った。



4人の遺体が見つかった現場＝2004年9月9日、愛知県豊明市で

別の元捜査幹部は、「里奈さんが刺された傷の数を今でも覚えている」と言った。利代さんもうつぶせで多数回、刺されており、「母と娘だけ背中を執拗に刺した理由は何なのか」と今も問い続ける。

別の元ベテラン捜査員も、焼け跡に入るなり「何という現場だ」と衝撃を受けた。「子どもたちまで手にかけるのは、正気の人間のなせるわざではない。発狂した者の仕業なのかと。あんな現場は警察官人生で初めてだった」と振り返る。

犯人の動機は不明だが、話を聞いた元捜査員らは「物取りではなく、殺害そのものが目的」との見立てを語った。犯人が1人なのか複数なのかは、意見が割れていた。ある人は「1人で4人も殺害することが単純に『可能』なのだろうか」と言った。「男性は頭を一撃、女性は多数回の刺創と、男女で殺害態様が違う上に、灯油をまいて火まで付けている。単独犯でできないこともないが、相当難しい」と話す。

豊明母子4人殺人放火事件の情報提供は、愛知県警愛知署特別捜査本部＝電0561（39）0110（代表）＝へ。

犯人像 絞りきれず

被害者に防御創など抵抗の痕跡はなかったとされる。次男以外の3人は2階の自室で寝た状態だった。元幹部の1人は「1人で4人を順番に襲えば時間がかかり、他の家族が気付くのではないか。そんなに静かに犯行に及べるものなのか」と疑問を語った。そして、「正悟さんだけが1階にいたのは、気付いて逃げようとしたからかもしれない」と想像する。

一方で、別の元幹部は「共犯がいると後々に発覚などのリスクが高まる。周到に準備した上でなら、1人でも可能だ」とみる。

見つかっていない凶器について、元捜査員は「包丁では刃こぼれするが、サバイバルナイフなどの硬い刃物なら4人の傷の形状と矛盾しない」と主張する。ただ、別の元刑事は「刀のつばのようなものがないと、あれだけ多数回刺せば、血で滑って自分の手を切ることがよくある。けがをした可能性もある」とも指摘する。

もしかしたら現場には血痕や指紋、足跡、皮膚片など、犯人の痕跡が残っていたかもしれない。しかし、火炎と消火活動の放水で、あったはずの多くの物証が損なわれてしまった。元捜査幹部は「事件はやはり現場が基本で、現場が全て。でも豊明事件はその現場が語らない。何もないんだ」。多くの捜査員が、放火で証拠が失われてしまった無念さを口にした。

また、当時は寝静まった時間帯で目撃がなく、今ならどこにでもある防犯カメラやドライブレコーダーも周辺になかった。ある元刑事は、唯一の「目撃者」と思われた一家の愛犬ジャッキーを見て、「あの犬の目や脳の中に入れたらどんなにいいかと、何度も真剣に思った」と吐露した。

元幹部は、小さな正悟さんの亡くなった姿が今も頭の中に焼き付いて離れない。命日には現場の方角を向いて手を合わせている。「豊明事件を『置いてきた（解決できなかった）』ことが申し訳なく、悔やまれてならない。もっと捜査を続けたかった」と繰り返した。

「ないものを後悔しても仕方ない。やるべきことをやるしかない」。そう元幹部たちが語った捜査は、ほかの未解決事件と比べても特殊な経緯をたどることになる。捜査を検証するために、私は関係者にアプローチを続けた。

連載「風化とたたかう」の過去の記事はこちら

社説

「彼ら」に映る「私たち」

週のはじめに考える

もう30年近くも前になるのですが、「ブラジルのある町の町長選に住民がヤギを立候補させた」という海外トピックスを半信半疑で読み、それを題材に短いコラムを書いたことがあります。

確かに、「出馬」とは言うが、「ウマ」「シカ」では首長は務まらない。でも、「クマ」の強権も「キツネ」にだまされるのもごめんだし、「イノシシ」の暴走も怖い。「イヌ」はひたすら選挙民におもねり、「ネコ」は理念や政策をクルクル変えるだろう。そこへ行くと「ヤギ」は自分を犠牲にして働いてくれそう…とか何とか。

そんな古い記事のことを思い出したのは、最近、また、「人間以外の候補」にまつわる話を本紙で読んだからです。

人間の方が「アバター」に

米ワイオミング州の州都シャイアンの市長選に、「AI（人工知能）候補」が出馬か、というニュースです。地元メディアなどによれば、市民のビクター・ミラーさんが生成AI「チャットGPT」を自ら改良したプログラムを、自分の愛称とも重ねて「仮想統合市民」を意味するVicと命名、その候補者名で出馬に向けた手続きを進めている、との由。

米グーグルも最近、日本の47都道府県それぞれの地域課題に特化したAIモデルを開発するという自治体向け事業を発表したところで、行政や政治のサポート役だというなら驚きません。でも、ミラーさんは、当選すれば自身は「生身のアバター（分身）」となり、あらゆる政策判断はすべてVicに委ねると明言しているのです。

しかし、そもそも、AIに市長ができるのでしょうか。この際、「AIに市長は務まると思うか」とチャットGPT（無料版）に聞いてみました。回答は―。

〈AIが市長を務めることができるかどうかは、多くの要因によります。AIには強みと限界がありますので、それを考慮する必要があります〉と前置きした上で、まず「AIの強み」として①データ分析能力②公正さ③効率性―を列挙。逆に、「AIの限界」として❶感情や倫理の理解❷柔軟性と創造性―などを挙げた上で〈市長の役割を完全に果たすことは現時点では難しい〉と結論しました。

妙に殊勝ですが、あえて、回答にあった「強み」「限界」の詳述を基に想像してみると、「AI市長」はこんなイメージか、と。

働き者で堅物、心はない

データ分析は大得意（①）で、個人的な利害関係や感情に左右されることなく公平な判断を下せる（②）し、24時間、365日、働ける（③）。ただ、市民の感情に共感する能力が欠けている（❶）上、予測できない状況に対する柔軟な対応に限界がある（❷）…。

どうなんでしょうね、こういう市長。「人の気持ちや機微が分からず、臨機応変の対応もできないやつなどごめんだ」という人も、逆に「クールで堅物、おまけに、超の付く働き者」を思う人もあるか。

ただ、米メディcについては、を提供する企業ル違反だとして、クセス遮断に動適格性を疑問視にまでこぎ着けはいささか不透

ともかく、ヤよ、投票で選ぶ間以外」に求め底にあるのは、の不信でしょう。方々は事毎に有くれますが、一・スマイルズと、にも一理ある気

この英国の著には翻訳が本邦となった『西国とこんなことを

―国民のレベのレベルは同等